

2024年(R6年)

12月

No. 390

ひとはつうしん

TOHATSUUSHIN

(ホームページアドレス) <http://hitoha-fukushi.com> (メールアドレス) honbu@hitoha-fukushi.com



社会福祉法人 ひとは福祉会
〒739-1203

広島県安芸高田市向原町長田1857番地

TEL(0826)46-2960 FAX(0826)46-4355

去る10月26日、5年ぶりとなる通常開催のひとはまつりを行いました。コロナ禍の影響とこれまで夏の終わりにあったまつりが秋開催という事もあって、準備段階から「どう準備してたっけ?」という事がとても多く、実行委員会を重ねながら思い出していくというドキドキの中での開催となりました。始まってみるとバ配は何だ、たのかというくらいさらうの皆も本当に楽しそうで、あ、という間にファイナルに。

来られた方の声を紹介します。

「みんなが底楽しさでいる時間を自分たちも共有できることは本当に良かった。また来年もお願いします」(出店で来られた地域おこし協力隊の方)

「よかったです!少ししたら帰ろうと思ってたんだけど気付いたら昼過ぎまでいたんですよ。ステージも面白かったし、何より本当に楽しかった。」(田坂農園の方)

ひとはまつりを通じて、ひとはの雰囲気などを知ってもらう良い機会になったんだと改めて感じた言葉でした。

「おもしろい、おもしろい、ひとははおもしろいのが一番じゃ」との言葉のように、とてもあったかく楽しい雰囲気を感じることができました。最後に、長田下地域

自治振興会をはじめ、ご協力いただいた多くの皆様、皆様のご協力あって無事盛会に終えることが出来たと感謝申し上げます。さらう皆とやり切った感をかみしめることができました。

(就労センターあづさ 城崎 高治)



副会長高田洋和

- 社会福祉士の資格取得のため、ひとはに実習に来られました -

広島国際大学4年生 尾添成美さん

個別支援計画の面談に同席させてもらったことが印象に残っていて、利用者の人や職員さんと話をすることもあったけど、ご家族から話を聞く機会はなかなかなかったので、貴重な経験だなと思いました。実習のカリキュラムの一つに計画を立てるというのがあって、サービス等利用計画を立て、実習の中で発表する時間がありました。

日中活動の前にホームに入りましたが、水田淳也さんとしゃんけんをするのが日課でした。水田さんより:(実習最終日の)今日は勝った! グー出して勝ちました。

「今年もひとはチームで“元就の里リレーマラソン”に参加しました!」

「出ればよかたなあ」と思っていた1年越しの思いをこの日走ることができて、すごく達成感がありました。唯一走ることだけは自信を持っていた子ども時代を思い出してもう一度走ることは続けていいだらいいだ...と思ったたり思ひつかったり。楽しい時間でした。



(ひあ・くらぶ 今岡 晴香)

去年応援で見に行った時、楽しそうでいいなと思い、今年の参加口は何を迷ったかですが、走ってみようかなと直感で感じたので、素直に参加することにしました。前半は青空を見ながら気持ちよく自分のペースで走れましたが、後半のしんどいこと。でも無事2回走れて、自分で自分を褒めてあげたいと思いました。部署も障がいある方も年齢も立場も関係なく、チームとして一緒に過ごす場を自然に作れるひとはは、ほんとにいいところだと思いました。

(ひあ・くらぶ 升田 和世)

「通信配達のこと」

向井大輔さんはポストに封筒を入れた後に大きな声で「こんにちはーひとはですー」と言いました。すると中から女性が出てこられ「まあひとはさんねーいつも読ませてもらってるんよ~毎月大変だろうなあと感謝してるんですよ」と。向井さんのおかげで女性の思いを知ることができました。

また違うお家では毎回向井さんとお話しするのを楽しみにしてくださっている方がおられます。前任の田中秀典さんからの「少しの時間車の中で待っちゃってーや」という思いを引き継いで他のきらうと一緒に(0分くらい二人のやりとりを見守るという、とても温かい時間が流れています。 (ひとは工房 二宮由香里)

「ひとはまつりのコマ」

スタッフの佐々木さんに声をかけてきた谷本佳穂さん。楽しそうにステージを見ながらお話をされていた時の出来事です。立ってステージを見ていた谷本さんに席を譲った佐々木さん。ところがすぐにどうぞ返しをされたのです。近くで見ていた私は“おなかの大きな佐々木さんを気遣って譲ったのだな”と思いました。谷本さんの自然体でされたその行動に感動…とても素敵な一日になりました。

(ひとは作業所 関内宣子)

「地域の方と」

重村さん宅にて、ひとはまつりでのお礼を伝えると「吉田口のあっこはなんて言うんかいね?」「あ、はいですよ」と答えると「そうよ、そうよ!」と重村さん。「わし、出店のヨーヨーにあったら。そんだら、岡田君がすぐに横にピタッとくっついてずっと話しそうなんよ。ダンスしよう言われて一緒にステージにあがったんで。岡田君、元気にしとったわ。昔、やきそばも作ったよ。久しぶりに会えてよかったです」と教えてくださいました。

溝上さんは「初めてクレープ食べた。おいしかったよ。また来年も行くけ頑張らんとね」と。

迫井さんは出店のチケット販売をお手伝いしてくださいり、何を言わなくとも「正」の字を書いて販売を。まつりが終わる時には売り上げが分かっており、残ったチケットと数も売り上げもりもり!今回の通信配達は、話が弾みに弾みました! (ひとは工房 増野奈緒)

「ひとは40周年を前に一

「人間ホールの思い出」

『人間ホール』は1989年から始まりました。その名称は、高齢者・障害者・健常者という、人という意味の者の前にある高齢・障害・健常という冠を取り払い、同じ人間として共に楽しめるものにしたいという願いを込めて決められました。そのため地域の人を中心してその年々の流行を取り入れながらいろんな企画を毎回準備して参加者を楽しませてくれました。

第1回の企画は『ザ・わたしたち』のコンサートでした。ヒューマンソングを歌うことを主目的に活動する彼女たちは企画意図を体現してくれ、以降人間ホールの開催に欠かせない存在となりました。

また当時大流行していたディスコを向原に作ろうと催された第2回の企画は、その後語り草となりました。私自身は参加していませんが、当時大盛り上がりたことは想像に難くありません。古参のスタッフから「あの時は…」と聞かれたものです。そんな思いからディスコの企画は再び復活し、第20回(2008年)には私自身も参加し、すごく感動したのを覚えています。

そんな人間ホールも第29回(2017年)を『ザ・わたしたち』のコンサートで締めくくり29年にわたる歴史に幕を閉じました。

しかしこれで全てが終わるとは思いません。人間ホールで培われた思いは今もひとはに息づいています。夕方の共同ホームには彼女たちの歌声が響いていて、その思いを知ることができます。 (原田圭介)

編集後記

4月号から「ひとは40周年を前に」のユニークを始め、40年を迎える中で、今までにやってきたイベントや活動を申しだし、ひとはに長く関わってい立派な老練のあきら(原、高橋真)をしていました。その中で「アーティスト」をしてことがあるこという話を聞いた。商店街ではアーティストか残りの服を売られており、夕方から開店し、(土)事帰りの人の行列がごく普通だ。ひとはに土曜日もまたまた開いています。(内 宏美)